



アユに誘われて熊野の自然と信仰に触れる コロナ禍の中で三密を避けて、パート3



古座川（和歌山県）

船本 浩路

<はじめに>

紀伊半島には日本の河川を代表する素晴らしい川がある。そして、それらの川の流域にある集落には、実に多くの日本の原風景が残っている。アユ釣り師は川を広く釣り歩くのでそのような風景をたっぷりと味わえる。また、アユは自然度の高い川の指標生物であるので、アユの川を歩くことはイコール豊かな自然に溶け込んだ川風景に出会え、心までも豊かになってくるようだ。中でも熊野にある古座川は本州最南の海（串本町・熊野灘）に注ぐ魅力的な川である。ダムが本流にあるなど少し残念なところがあるものの、ダム上流、支流の小川は透明度が極めて高く、その美しさは東京から和歌山に移住された水中写真家の内山りゅう氏が絶賛している。今ではそのことが知られてきたのか、自然を生かしたキャンプ、カヌーのメッカとなっている。

例年アユの季節（初夏から）になるとこの川のことが気になる。ところが、今年は、コロナ禍でアユ釣りは諦めていた。しかし、考えてみれば、私の釣行スタイルはマイカー泊。また川では釣人のいないポイントを狙って入る。食もコンビニでの調達が多い。したがって三密からほど遠いものである。また、地元にも入川料やおとり代で幾分かはお金を落とすことになる。超微々たるものだが、地元経済にも貢献できる。

これで「大義名分ができたぞ！」と8~9月は古座川に通った。しかし、地元の方から、大阪方面ナンバーはまったく気にならないわけではないとの心境を聞かされた。その時には取り敢えず私の釣りスタイルを説明した。

歳と共に腰痛が進行し今年はアユ釣りを半分に抑え、残り時間は熊野の景色をゆっくり眺めて見ることにした。大阪からここに来るには、まともに走れる道は5本あるが、今回はこの内4本のルートを走ってみた（右図参考）。普段は①半島西側の阪和自動車道を利用する。泉大津から約3時間。残り3ルートのうち、1本は②半島東側の名阪国道～伊勢自動車道等の利用。それぞれ紀州灘、熊野灘のある海側を走る。残り2本のうち、1つは③熊野川に沿って五条、十津川、新宮を経由する道。もう1つは④吉野、大台ヶ原西側を通り熊野市に出る道である、いずれも紀伊山地を縦断する山また山のカーブの多い道路である。

古座川のある紀伊半島南部はかつて熊野の国といわれ、畿内大和国の南の辺境地である。しかし、今はやたらと世界遺産の標識が目立ち、特に古道入口の標識や神社仏閣の案内板が多く賑やかである。皆さんもご存知かもしれないが、ここには「紀伊山地の霊場とその参詣道」という名の世界遺産がある。今年は世界遺産になって15周年の節目の年だそうだ。毎年通っている熊野だが今までそんなことはまったく興味もなかった。しかし、今回は気持ちを切り替えて、世界遺産になった信仰の熊野、巡礼の熊野についてその歴史を少し詳しく調べて紹介したいと思う。少し我慢のお付き合いを・・・。



<紀伊山地の霊場とその参詣道とは>



世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の登録資産

霊場	吉野・大峰 (修験道)	吉野山 吉野水分神社 金峯山寺 吉水神社 大峰山寺
	高野山 (密教)	金剛峯寺 慈尊院 丹生官省符神社 丹生都比売神社
	熊野三山 (神仏習合)	熊野本宮大社 熊野本宮大社旧社地大斎原 熊野速玉大社 熊野那智大社 那智山青岸渡寺 那智大滝 那智原始林 補陀洛山寺
参詣道	高野山町石道 大峰奥駆道	小辺路 中辺路 大辺路 伊勢路
	熊野参詣道	小辺路 中辺路 大辺路 伊勢路

この世界遺産は文化遺産として2004年に登録された。修験道の「吉野・大峰」、密教の「高野山」、神仏習合の「熊野三山」と三個の異なる宗教の霊場とそれらをつなぐ参詣道から構成されている（前頁と上の図表参考）。特徴としては、霊場である神社とお寺が親密に関わっており、神と仏が敵対するのではなく、融合し、共存していることに、「参詣道」がその中に含まれていることだ。参詣道としては他にスペイン・フランスの「サンティアゴへの巡礼道」があるのみだ。さらに、文化遺産でありながら吉野山、那智大滝、那智原始林など自然景観が資産として多く含まれている。これは世界に誇るべき日本の文化遺産かも知れない。

<わかりにくい宗教用語を調べてみる>

霊場や修験道、密教、神仏習合などの言葉は今までにも耳にしたことがある。しかし、馴染み難いのかいつも中途半端な理解に終わってしまう。同感と思

っておられる方もいそなので、これらの用語についての解説から始めることにしましょう。

靈場とは簡単に言えば現世利益を求める人間の欲求を、超自然的な存在がかなえてくれる場所という意味になるだろうか。一般的には神社、寺院、聖人の誕生地、墓などといったところがあげられる。神聖視される場所であり、古くから信仰の対象になっており、現在でもお遍路や修験者などの往来の多いところがある。恐山、羽黒山、比叡山など数多くの靈場が存在する。四国 88か所もそうだが一般的には山岳信仰に根ざしたものが多い。

修験道とは日本古来の山岳信仰に、密教や中国伝来の道教の神仙思想などを取り入れた日本固有の宗教である。山々に代表される大自然を師と仰いで山の奥深くに籠り、自己に衣食住の厳しさを追及することにより、超自然的な能力（験力）を得ることで、衆生救済を目指す実践的な宗教と考えることができる。また修行の実践者は「修験者」と呼ばれ、山奥に伏して修行することから「山伏（やまぶし）」とも呼ばれる。7割近くは山という日本を考えればこのようなものが生まれるのも自然なことかもしれない。修験道の成立時期は定かでなく、縄文時代より存在していたといわれる山岳宗教（信仰）を母体として、さまざまな宗教思想や慣習、作法などが取り入れられ、古代・中世初期にかけ、徐々に確立していったものと考えられる。

密教は秘伝的な儀式（護摩を焚くなど）や修行、曼荼羅などの神祕的な図像、声明などの音響的な効果を活用する秘密仏教である。このような教義は一般人には理解できないものなので密教といい、それに対して經典によってその教えが示されていて誰でも解説できる仏教を顯教という。このような大乗仏教の二面を併せて顯密という言い方をする。密教は6世紀ごろベンガルやカシミールに起り、チベット仏教にも取り入れられ、中国にも伝わって中国仏教の中で独自に発展し、真言宗が成立した。真言宗は平安時代に空海が日本に伝え、東密と言われる。天台宗を伝えた最澄も密教を学んでおり、天台宗の密教は台密という。なお、高野山金剛峯寺は密教修行の拠点である。

神仏習合とは仏教が日本社会に根を下ろしていった時、仏は、日本古来の神々とは対立せずに融合していった。平安時代中頃には、日本の八百万の神々は、実は仏や菩薩が化身として日本の中へ現れた「權現（ごんげん：神様）」であるとする「本地垂迹説（ほんじすいじやく）」が流布した。本地とは仏・菩薩の本来の姿であり、垂迹とは衆生を救うためにとる神などの仮の姿をいう。

<日本の宗教の流れ(概要)>

個々の宗教用語の理解をしてもその関連性や歴史的な背景がわからずピンとこない。そこで、一度日本の宗教の大雑把に歴史的な流れを整理してみましょう。

そもそも、宗教的行為は日本に限らず様々な形で世界各地に見られるが、宗教は世界の全ての集団で見られる普遍文化的な現象である。世界一般的には生

物・無機物を問わないすべてのものの中に靈（心の働きをつかさどると考えられるもの）が宿っているというアニミズムの考え方や祈祷師シャーマンの能力により成立している宗教（シャーマニズム）のようなものから多神教、そしてイスラム、キリスト、ユダヤ教のような一神教へと進んだ経過がある。

日本の場合で考えてみると、まず自然崇拜（自然物・自然現象を対象とする崇拜、信仰）や祖先崇拜（既に死んだ祖先が、生きている者の生活に影響を与えていたという信仰）に始まり、それが氏神信仰、つまり集落の発展の中で地域を守る神様への信仰などいわゆる八百万の神が出現する。この頃は、神社というものはなく、山や木や場所などがご神体となり（下写真参考）、祭りの時には神が降臨する依り代をたて、祭りが終わると取り払われた。その時に立てる仮小屋のことを「社（やしろ）」といい、それがのちに神社の原型となった。

さらに仏教（538年伝来）、道教、儒教などが大陸から伝わり影響していく。大きな転機が訪れるのは8世紀初頭に『古事記（712年）』と『日本書紀（720年）』という日本初の歴史書が著された時。この歴史書により、国内、国外に向けて、日本は神を祖先とする天皇を中心とした国家であることが示される。それと同時に「神道」という言葉が初めて記され、『日本書紀』において、「天照大御神」が皇祖神（総氏神）であり日本民族の最高神とされ、天照大御神を祀る伊勢神宮が日本の神々を司る頂点の神域とされた。

つまり、仏教が入ってきたことが契機となって神道の考え方が整理されていったようだ。八百万の神はそもそもキリスト教やイスラム教の様に一つの神を絶対視するものではなかったことから、奈良時代には神道と仏教は敵対することなく、お互いに結びついて「神仏習合」となる。そして、寺院に神が祀られた形はその後千年以上にわたって続いた。神仏混淆（しんぶつこんこう）とも言われる。鎌倉時代には、神と仏を調和させる理論的裏付けである「本地垂迹説」が生まれる。



この神社には熊野三山に祀られる熊野権現が初めて地上に降臨した伝承がある

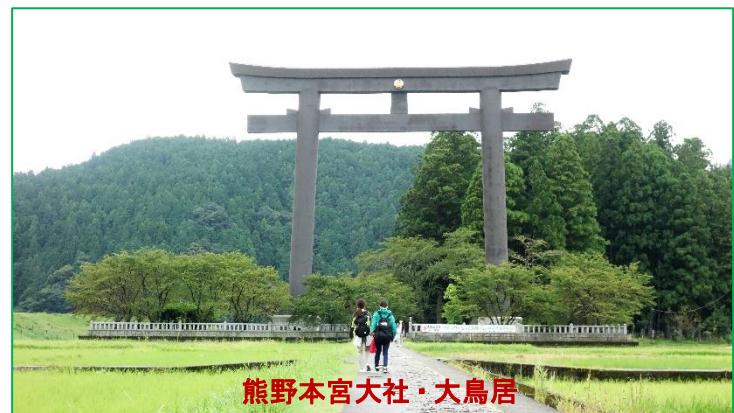
<熊野にある三つの神社と寺院>

さて、いよいよ熊野信仰についてお話を始めましょう。熊野信仰の対象は熊野三山である。三山とは、熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社の神様である。しかし、那智大社の境内には那智山青岸渡寺(西国33か所一番札所)があり、また、近傍には補陀洛山寺(ふだらくさんじ：南方の補陀洛浄土を目指し渡海する上人達の出発点)があるというように神社とお寺が混在している。熊野の神々のことを熊野権現という呼び方がよく使われるが、この権現という神様は仏が化身して現われたものとはすでのご説明したとおりだ。

つまり、熊野も本地垂迹思想を受け入れ、熊野本宮の主祭神の家都御子大神(けつみこのおおかみ)は来世を司る阿弥陀如来を、熊野速玉宮の主神の速玉大神(はやたまのおおかみ)は前世を司る薬師如来を、那智の主神の夫須美大神(ふすみのみこと)は現世を司る千手観音を本地仏としている。熊野の神々は熊野権現と呼ばれ、熊野三山のそれぞれの主祭神をまとめて呼ぶ場合は**熊野三所権現**という。



熊野本宮大社・社殿



熊野本宮大社・大鳥居

<蟻の熊野詣>

熊野の名が広く知られるようになるのは、上皇による熊野御幸が行われるようになってからだ。「御幸」とは上皇・法皇・女院の外出。熊野を初めて詣でた上皇は平安時代の宇多法皇で、907年のこと。その後も続き、1090年には白河上皇(1034~1129)が熊野を詣でる。この白河上皇が実に9回もの熊野御幸を行う。白河上皇の度重なる熊野御幸が、熊野信仰が熱狂的な高まりを見せるきっかけとなった。

しかし、なぜ遠方の辺境地、熊野だったのだろうか。その理由の一つは古来よりこの地は神域とされていたこと。また、その後全国の靈山で多くの山伏が修験道を目的に修行をしていたことが世間に広く知れて、上皇が山岳宗教の聖地に興味を持ったのかも知れない。ちなみに、山伏が上皇を熊野に案内したようだ。「蟻の熊野詣」というように、熊野詣する人が蟻の行列のように続いたということだが、それはもう少し後のこと。熊野が庶民にまで広まった理由があるが、それは阿弥陀仏への信・不信は問わず、念佛さえ唱えれば往生できると説いた一遍上人の存在だ。

熊野本宮大社のHP資料には、次のように書かれている。『一遍上人（1239～1289）は、鎌倉中期から室町時代にかけて日本全土に広まった浄土系仏教、時宗の開祖です。時宗の念仏聖たちは、南北朝から室町時代にかけて熊野の勧進権（布教活動を行う権利）を独占し、それまで皇族や貴族などの上流階級のものであった熊野信仰を庶民にまで広めました。ではなぜ時宗では熊野を聖地としているのでしょうか。その答えが次の逸話にあります。僧侶として学び、修行を深めた智真（後の一遍上人）は、念仏札を配る布教活動をしていました。そして文永十一年（1274）の夏、高野山から熊野本宮大社へ向かう途中で、一人の僧と出会います。智真はいつものように「信心を起こして南無阿弥陀仏と唱え、この札をお受けなさい。」と札を渡しましたが、その僧は、「いま一念の信心が起りません。受ければ、嘘になってしまいます。」と言って受け取らませんでした。「仮の教えを信じる心がないのですか。なぜお受けにならないのですか。」と尋ねると「経典の教えを疑ってはいませんが、信心がどうにも起こらないのです。」と答えました。念仏札を拒否されたことに一遍はショックを受けますが、僧の言葉は理にかなっています。

この出来事から、智真は布教のあり方について苦悩します。そこで熊野本宮大社に着いた時、答えを求めて、証誠殿の御前で祈り続けました。すると夢の中に、白髪の山伏の姿をした熊野權現（阿弥陀如来）が現れました。そして「一切衆生の往生は、阿弥陀仏によってすでに決定されていることなのです。あなたは信不信を選ばず、淨不淨を嫌わず、その札を配らなければなりません。」と、お告げになりました。このお告げを受けた智真は「我生きながら成仏せり」と歓喜しました。一遍上人が誕生した瞬間でした。』とのことである。

さらに時は進み、江戸時代になってからは、修験道の遊行が禁止され、彼らはその土地、土地の里に定住するようになり、その里の修験者達が近辺の庶民を山に連れて行くようになって、庶民がどんどん修験道を行うようになったそうだ。その名残が大峰山講などの講として今でも残っている。

＜熊野詣で何を祈願したのだろう？＞

極楽浄土という言葉があります。極楽とはこの上なく安樂な世界のことであり、極楽の反対の言葉は地獄。浄土とは仏が住む清らかな国のこと。浄土の反対は穢土（えど）という。清浄な土地による世界が浄土、穢れた土による世界（この世）を穢土と名付けた。平安時代の終わりに末法思想が流行し、お釈迦さまの教えが絶えて、この世が天変地異や飢饉などで終わりを迎えようとする。そんな穢れたこの世を離れて、清浄な世界であるあの世、つまり仏さまの世界へ往生（行って生まれ変わること）したい。それが浄土往生思想だ。

この当時は「生まれ死に、死に生まれる」という輪廻の考えが常識の時代だったから、死んで阿弥陀さまのいる浄土に生まれ変わりたいと願う人が大勢いたようだ。例えば、西のはるか彼方には阿弥陀さまの住まう極楽浄土が、正反対の東には瑠璃色のまばゆい光に包まれる薬師如来の浄土があると経典で説か

れている。さらに南方の補陀落という山には観音菩薩の浄土があると信じられてきた。仏教を信じる者には仏さまの世界、浄土へ往生したい。仏さまの下で安樂に暮らしたいと強く願っていたようだ。

平安時代後期以降のこのような浄土信仰の広がりのもと、繰り返しの説明になるが熊野では本宮の主神の家都美御子神は阿弥陀如来を、新宮の速玉神は薬師如来を、那智の牟須美神は千手観音をそれぞれ本地（本体）仏とされていたので、本宮は西方極楽浄土、速玉（新宮）は東方淨瑠璃浄土、那智は南方補陀落（観音）浄土の地であると考えられ、**熊野全体が浄土の地**であるとみなされるようになったそうだ。なるほど、中世、人々は浄土に生まれ変わることを願って、熊野を詣でたことが頷ける。昔人は死んでも生まれかわるということをどの程度信じていたのだろうか？

<熊野が巡礼の聖地になった理由は？>

熊野巡礼は生きている間は神様に、死んだあとは仏様に救ってもらうことをお願いする旅だったのか。たしかに、ここ熊野は「神仏習合」の考え方に基づいて神様も仏様もいるところであるからその希望が叶いそうだ。

吉野山は、歴史的にも古く、すでに奈良時代には宮が置かれ、天皇のご行幸もあるなどしている。また、古来より桜の名所として知られ、南北朝時代には南朝の中心地でもあった。修験道はここが発祥の地であり、都人には古くから馴染みがあったように思われる。その吉野山の南は紀伊山地の山が連なり、奥に行けば一層険しい山々になってくる未知の土地が多い所であった。そこを修験道たちが修行の場として熊野まで切り開いていくのだが、それは都人にとつては、熊野は吉野のさらに南、南の果てと理解する。そして、険しい山の先には海が広がる。地の果てはこの世の果てであり、そして、浄土（あの世）への入り口、神仏の世界への入り口のように思えたのだろうか。そして南の海に極楽浄土を眺めてみたいという気持ちが巡礼を駆り立てられたのだろうか。私も、アユをもっと釣りたいと駆り立てられ、気がつけば本州最南端の熊野・古座川まで來ていたのだった。この先は浄土での釣り場しかないのである。何か同じような心理作用が働くよう思う。

ところで、熊野は都人も行けない距離ではなかった。都から徒步の旅で往復 600km、約 30 日程度である。近からず遠からずで、巡礼・修行には適度な距離だったかも知れない。また、修験者、山伏の存在も大きい。彼らは熊野古道を切り開き、参詣者の道案内までしていたのだ。その彼らに上皇が誘われて熊野にやってきた。そして、熊野の靈験を伝えられ、熱心な熊野信者になった。上皇たちの熊野詣が熊野を日本の聖地にしたきっかけだった。

<熊野信仰から感じたこと>

熊野は山と海の国である。そこに住む人々はこの豊かな自然から恵みをいただき、また集落では仲たがいせず、お互いにうまくやって行けることを願って生活してきた。時には厳しくもある大自然の中で、自然と上手く付き合っていくという視点からの自然信仰や村を守る視点からの氏神信仰、生き抜くための精神的な支えとしての山岳信仰、そして神々とは別の視点に立つ外国から導入された仏教など多様な宗教が必要だったのだと思う。

日本は島国である。いざこざが起きても新天地を求めて海を渡るという発想は多くの昔の人にはなかったと思う。この島で一緒に暮らしていく覚悟がすでに出来上がっているので、もめごとが起こっても、皆でうまく折り合いを付けていく。そのためには特定の宗教を排除するのではなく共存の道、すなわち多神教の世界が必要だったのでは・・・。一方、海外（大陸）では未開地の開拓や侵略によって他所を目指す傾向があったので日本の（島）な発想は生まれにくかった？しかし、考えてみると地球も時代と共に島のように狭くて限りあるものとなりつつある。そして、温暖化やコロナなど地球規模で問題が起きている中ではこれを避けようとしても行くところはない。今こそ日本の島民気質の特徴を生かして世界各国で折り合いが求められる時に来ている。もはや異なる宗教や文化で敵対する時代ではない。

この文章の冒頭でスペイン・フランスの「サンティアゴへの巡礼道」が世界遺産となっているとご説明したが、少し前だが、NHK・BS の 3 回シリーズでの巡礼が紹介されていた。素晴らしい風景の中を歩いている映像が目に入り思わず行ってみたくなった。

サンティアゴ・デ・コンポステーラはスペインの北西部にある町。ローマ、エルサレムと共にカトリックの 3 大巡礼地といわれている。キリストに仕えた 12 使徒のひとりヤコブはキリストの死後その影響力を恐れたユダヤ王によって殺された。その亡骸は弟子たちによって船で運び出されたものの、それがその後どこに埋葬されたのか一切わからなかった。9 世紀にその墓を星に導かれた羊飼いがこの町近くの原野に発見した。これは奇跡の発見といわれ人々は歓喜した。サンティアゴ・デ・コンポステーラにはその後大聖堂が建てられ巡礼が始まった。12 世紀に 50 万人。今、世界的に宗教離れが叫ばれているが、なぜか世界各地から大勢の人々（2018 年 35 万人）がこの道を訪れるようになった。ちなみにサンティアゴはヤコブ、コンポは野原、ステラは星のことである。

フランスやスペイン各地から主に徒步でサンティアゴ大聖堂を目指すそうだがフランスから歩くと実に 1500 キロメートルにもなるという。巡礼者は純粋にカトリックに基づいて巡礼する人は極めて少なく、多くは心の平安や人々との交流を求めて巡礼をしているという。この巡礼道にも日本の 88 か所巡礼と同じように無料宿の提供などのおもてなしはあるそうだ。巡礼者をもてなすことはキリストをもてなすことになるそうだ。四国ではお遍路さんが弘法大師様だそうだ。歩く目的も、おもてなしも今の日本人の感覚と非常によく似ている。昔とは歩く目的は違っても巡礼は時代を超えて続いているものだと感じた。

<参考施設及び資料>

- ・三重県立熊野古道センター <https://kumanokodocenter.com/>
- ・修験道に学ぶ 田中利典（金峯山修験本宗宗務総長）第七回日本野外教育学大会 2004
- ・み熊野ねっと <https://www.mikumano.net/>
- ・熊野学 新宮市教育委員会 文化振興課 <https://www.city.shingu.lg.jp/div/bunka-1/htm/kumanogaku/index.html>
- ・熊野本宮大社 <http://www.hongutaisha.jp/>

<熊野三山以外の熊野の風景>

熊野と言えば少し薄暗くヒノキやスギに覆われた古道の写真が紹介されることが多い。自然への畏敬・畏怖の念を抱く神秘的な場所にある暗く細い山道をひたすら歩くと深く豊かな自然に抱かれた聖地、熊野が現れるというようなイメージがつくられているのではないだろうか。明るいイメージでは表現されないことが多い。しかし、熊野全体のイメージはそうではない。聖地の神域を除けば明るいイメージも多い。例えば、私のフィールドである古座川流域はノスタルジックな風景が広がり、紀東のリアスの海や浜街道といわれる広大な七里御浜はいずれも、明るくて穏やかな土地である。また、驚いたことに訪れた銚子川、北山川、古座川は今までに見たことのない多くの親子キャンパーで賑わっていた。みんな、コロナ禍で気づいたのかも知れない。自然の中で、水遊びの面白さを・・・。アユ釣りをしながら遠くから彼らの歓声を聞いていると、自然体験は子どもの健全な成長には欠かせないものだと感じた。最後に、靈場や参詣道にはあまり関係のない熊野の自然を写真で紹介したいと思う。★印のある写真は後ろに簡単な説明有。







★丸山千枚田（熊野市）



★丸山千枚田（熊野市）

<写真の簡単な説明>

★鬼ヶ城 波の侵食と数回の大地震で隆起した凝灰岩の大岩壁。長さ約1kmの間に大小無数の洞窟が階段状に並んだ奇岩奇勝で知られる名勝。

★七里御浜海岸 熊野市から紀宝町に至る約22Km続く日本で一番長い砂礫海岸。

★尾鷲ヒノキ（速水林業・大田賀山林）

日本初のFSC認証林。ヒノキやスギ以外の広葉樹の低木や下草を生やし、表面土壤の流失を防ぐことで土壤を維持し、そして、間伐を欠かさずに日の光を入れて、明るい林を造ることで、生物の多様性を確保している。日本が世界に誇るモデル林。山全体を「山と尾鷲ヒノキの博物館」として一般に開放している。

★ぶつぶつ川（二級河川） 川の長さわずか13.5mの日本一短い川。ブツブツと清水が湧きだしていることから川の名がつけられた。

★丸山千枚田

約400年前には2,200枚があったという記録が残されている。1994年「丸山千枚田条例」の制定、そして地元住民と町との協力により、現在は1340枚を数える。5月の水を張った時期や、9月の稻が実った時期の景観はカメラマンの方は必見。